



拾遺集



弘化四年丁未春

俳諧笈集

憲屋曲淵編

叙

風雅を修むる者必しも
心成るの乃ち操をあらそひせ
おきよまはさくは名のみを
観て精神をこころに
こころされを家翁を北海の
碑をよむに成りては

あふまをさしつれ西へ入るを南より
徒らとてくちをさしほ人の居るを
実らとていもいもさしつれ曲り
さらば其のあはれをさしつれ樹の影の
秋をさしつれいもいもさしつれ
と秋のふりやうと入るを新あ
助のいもいもさしつれ月がくらの

集はらばいもいもさしつれ
ころころとさしつれあ見ようとして詞の
変は披れとあはれおきく月
かきおきくさしつれさしつれ
あはれおきくさしつれさしつれ
あはれおきくさしつれさしつれ
あはれおきくさしつれさしつれ
あはれおきくさしつれさしつれ

あけのつらさふおぼつた
神のあまふ志ひを許さる
しとあのおろさあせそ
笑さるひと辨るあふ

ああ
又け有節

有節

陽炎のまうとえて枯尾花
日とくくくと園の冬はれ
解控一掃のうへ茶飯書て
され返す後士乃大負振事
注連とて月れに去人明のり
學啼すも西の吹風
淵 節 淵

愿の跡本孔より物たる前久
火種もさひの灰あぶり行
撥篋平敷新むけ目の網を蛇
目利のやうに遠く入梅を
守らざる懐れ鈴を成すまじり
何ていふ母の泣きとき活やく
海越しの嫁入あはれ雜作は
荷杖扱出た屋振裏れ月
節 淵 節 淵 節 淵 節

存本れは穉の疵痕又おろり
ゆき筑波へよ久次なるあま
吾り小花年おろる能きま
人争そろいぬ御新信れ為
活き年ありて出候る炭と云
額 瓦れはのこられぬ 葉
長穉宜しあはれ汁粉の活あは
神の御立年夜は甚る池
淵 節 淵 節 淵 節 淵

燃さこのる大火よ幸れをよめ
汐吐すればはこれ蕪へる
致見てふそとけの女子よ
その日午階孔翼のつれく
鴉めのゆき啼とれは腰よ
而化書に扱す教は藤おき
八月のころ山寺の月く
温泉のほとり酒の湯き
節 節 節 節 節 節 節

笠のあも尾長徳旅をけ
漏れをともあやゆかす性底
何より土文に舞をふはつめ
くさるも牛けあも海はる
ありあけ花のや風よ白ひた
まよみ妻あ久井の結の更
節 節 節 節 節 節 節

山城

花咲て露よりけり梅林

梅室

尺盾けり明屋入ぬ星は底

虚白

藤花に海は声けり松の音

岱年

真由やけり義家も浮寝る

梅通

志保にそひりて藤の花の子

道機

雷引にそひりてまたある松は花

杜鰲

妻のありや抱き合ふ水車

九起

常盤木に花も実もけり冬独

持危

志くもやまふ半くすね綱千木

菖堂

又えそゆる珠のきこや稲の花

芳英

風櫃の黍をゆきけり女は

黙池

橋のつれなき言ひ半は秋

芥舎

いづれかあるまは丑寅の才と鬼形けり
こそあてあはれと平安の有か所ハ

雪風も日枝にふり来て花の妻

有節

水うせのおろす川田の煙ふ
 梅石
 神業と思ふ角ふる妻田丸
 草陽
 あれとまぬ村の歌殺や梅の花
 風光
 物め新し出立所しや宇村妻
 冬亭
 鳥うけもゆらや隣子年うつる梅
 馬朗
 根際ころ旭き流り月の松
 寒々
 位訓し葉屋のくしや妻は月
 松雨
 出てさよす巨魁の跡や月と梅
 祭典

風や日の入あゆみのいとけり
 如柳
 有能に一子一のひつとけり
 未明
 大川を流るる水は流るれぬ
 篤明
 眼のさけり水の音して又月寄
 朗風
 葉は花のさるに折る葉は煙屋
 仙歩
 雪もけりやけしゆと山の歌
 其夕
 秋妻の拾ひゆけりや流れは
 松朗
 葉さけりる葉とまかなるれ
 柳鶯

山より山あり一軒のちんちん
文翠

片隅へやういりみり月の月
柏翠

樵木やの影起つ久歩走非
芳水

うしろよりやういりおぼ
昌川

地車平交れおぼの起り
石外

川橋平とちりる堂舟藤おろ
雲角

物賣り長之て出るや夫の市
重泰

塙かゝの屋振ををれをて梅風
明良

卯の虫や黄鳥一羽啼つけ
狐柳

梅折や吐息しつる及こし
雨翠

虫の雪風も通ずる成り
秀何

おぼよびくちりや後振の夕烟
盛美

又手海せ舟のちり月海
南徳

一折しれする山隠のちり
亀洞

農父入の泣きしるや毎一日
梢蘿

七月小月夜平かゝる故き
乙雅

坂よりて休む処や女席花 屠籠

風に身はまきしやうやしの暗 成之

道より此のぬるかりき冬 拵 仙菓

配膳の刻てまのこは氷り花 蒼雪

霞より平の城跡をみる山松水 委水

夏越をて待つ子多し守村女 虚真

うぐれすや子殿のおもひあはら 佳良

昔のねのぬてし都一田の上 三蒿

花多し平のたもまのたて桂の家 普陽

との子の久き春の松葉や花のま 舞水

あると花の八重も一重も桜の乳 吳明

まのたれぬれぬれはまの雪州あも 鶯語

汗孔すす眼え志智し角力取 岳鳳

松のけり平志をくやるも白の 里の女

たるとたれぬるもいそぐや片くれ 須磨

まのりや雑木平もとの宇接 曲淵

撰津

万葉や庭お庭の月の光

脊戸の梅苔入けて三月哉 白鷗

夜もつゝ久日お減さるる川 其山

ゆゑに小よれぬつゝ唐のし 蟻兄

烟の子並拵て出らう橋の月 五繇

先達の松ぬはつゝむすのし 乙鷲

ゆき風や庭の草木を直撫 林曹

おろしを直に平流り岩屋好 素屋

送風平音や萩の葉音か 祇白

秋立や着重うけする奈月晒 月桂

常平元へすけ茶松も月夜か 白雀女

撤らる凍とけ子一教通う 杜鴻

雪解つゝつらまゝも枝梅か 斑竹

籠平啼る屋の鳥の小妻乳 万壽人

落せしと子めも咽や直海り突 松隣

雪の音あきらやもみれ
 入月のけを漱してて川
 中をみし雲の照るを帰む
 若所をぬそふて去り梅子庭
 かすむ日のけ流きり大いけ
 朝のほや中はおく甘ん種
 懐ぬの強の中やららるる
 たのこもは連喰たる神言は
 鶴人
 一東
 竹屋
 蘭窓
 藤涯
 喜久里
 松齋
 草居
 鳥宿
 光林
 都春
 太乙
 朱女
 静峨
 鳴く
 曲阜

朝の音あきらやもみれ
 入月のけを漱してて川
 中をみし雲の照るを帰む
 若所をぬそふて去り梅子庭
 かすむ日のけ流きり大いけ
 朝のほや中はおく甘ん種
 懐ぬの強の中やららるる
 たのこもは連喰たる神言は
 鶴人
 一東
 竹屋
 蘭窓
 藤涯
 喜久里
 松齋
 草居

茶をすする門へもつらや急所
入代り人立やよぬ柳々乳
冬岐

武藏

一具
一具
逸淵
伯遠
為山
由誓

得蕪
見外
流芝
祖郷
抱儀
松什
丁知
卓郎

秋の世や人を免送る籠りや 萬古

二行ゆきあつてよる木は美し 西馬

忘れ去る年串も一夢冬の月 溶々

飛雲の風流 川を田に 梅笠

宵れくも物年給れは時多 金令

古里れを人の煙を町の幸所茂 萬嶺

光をえのつらぬ祠や冬早寺 風齋

踏土のちろくくつけく崖の萩 稻雲

竹く急て井又ぬ森の空所如 岳陰

裸火や傍に信條や花の寮 山外

黄鳥や柳の中れ小くも 杜有

雪を板下も起りたて紙納豆部 遅流

秋の夜や露光て消る火お菊 百丈

たてあめさる年も風ゆりおら炭 氷壺

大汝平振つて居れて枯尾を 呉城

埋火平吹ぬ表に都一山の為 太郎炭

梅通

禁のなきて落しはき塔の光

あつとやうに影の月 曲淵

灰牙する懐のかさりと乾捨て

るのを乳しを肩おれて起く

ゆのさうし物り燈の下涼と

あつとの夕立け壁通しり

高きりの出しはたむ忘物取

をうれし縁のは合平乳る

かれ芦の才平やうし船とえ

うつろを細い道とあけ込

揚たての良鷹捕まらら母

屋変れたをを三乳り情る

七夕乃よれま平月の合り

を原平一光りのをる燭の如

おて来て網を足す川徳
音清なりぬるい詰合
豊隆綿の肩平角を打撃
くくたす常しし功との教子
各確し休めて寝ふは連打
抹息くは赤い響を解ゆ久
ゆまゆもたとりぬえぬ名譽
鴨の毛むくくくち作す
通 淵 通 淵 通 淵 通

おるし着のよき風を厭ふ襦袢
子飼の外をいれぬ衣籠
増すつては陰陽気味す口の毛
湖水平た久照処の角音
振すれぬ束のよしゆし思ひす
身かうとみして尻をきぬ尼
つゆ平れま月足の前の不徳名
むしり尻を挫かゆ久
通 淵 通 淵 通 淵 通

冬もわろく子以産牛村おのり
 此とおとくき事觸の何と
 お付の追く強る猪は交
 藤たろる孫の人えとみす
 さあやの平秋店法出す花盛
 地平しおとくぬ妻の猪書
 通 淵 通 淵 通 淵

近江

梅平出て日めつし教つ地 蕙逸
 山索もや三とせ立木子花ゆき 采友
 夕あ平一法石踏くや舟の中 東蒼
 平いあし音して月と梅 古推
 藤た牛の尻書れはう虫声 砺山
 足書平つ紙壁のあろ紙り 雀寸
 藤久れい西平成りる若の志 省甫

飯橋千 叙ぬの 爵て 功之

陶年

反吹へり 又んせる 徳吉け 表年

楓下

とろふは 龍子の 来人や 風中

鷺洲

ささるや 尤り 仰けり 桐花

栗々

啼けぬ 秋の 明るを また 雨古る

無名

地籠る 志井 子 起り けり 枯尾花

篤雨

暮又入や 又合えら の 中 泊り

玉脂

築山を 又 起る 隔て、 麦の 秋

烏都雄

渚に なるの 命 へ 果ぬ 幸 氏 氏

桃谷

修文 西の 雪と 又 けり 雪 けり

寔陽

目の うち けり 雪と 又 けり 雪 けり

松月

石路も 厥ふ さも けり けり 雪 けり

江涯

巴 又 本の 松と 又 けり けり 雪 けり

梅月

松山の 功 あり を 里 けり けり 雪 けり

巴居

吾 ね 月 の 小 里 と 又 けり 木 けり 雪 けり

南外

良の 次 を 雪と けり 城 守 若 けり 揚

箕玉

東の増年 明て秋立戸口身 不局
 口の家の灯をきく足て泪代古 秀山
 おもひけし春雪の聲や雪け雀 鷺山
 竹のそと枝及びまゝ置のあゝれ 花兄
 よいふ返をれてくわく女癖も 二江
 糸扱や猫の服をそく孔の時分 花峯
 そんゆふやあましく春屋奴の子 如風
 多れく扱一ゆふや一ゆふし 麟和

山紫もや嘆きまゝ山梅除 芋丈
 立あつとそむくや水干枯る芦 董洲
 うつゝ火や屏尻へくわく流のる 烏陽
 葉のくわく年のせしやまけり幸接 秀蘭
 戸の外け署へ放すや火とり虫 南阜
 海牙おろし風の吹くやけり雪 左外
 木の肌けけくふるや帰一花 穉之女
 松ヶけの月年流る雪のく 紫峯

巧よりくしと暖て折つ中押提子 湖舟
 こがしやけり暖る松竹幹 貞我
 鶉つぐひの家もゆき荒十束引 市南
 おもろとももきそ日の立や雪村家 杞柳
 ニニおむくも実出て吹す純 玉童
 尺舎しとも此笑話や壬生念仏 紫石
 外てまする火鉢のてりや冬籠 観遊
 雁水の灯をゆきまおるる涼亭 流燈

凡中不筆成とく凡て中不筆成 川蝶
 日の節や様をさるふ羽のうも 里籠
 変りくもは流孔ま秋の扇くれ 四許
 啼すも声いりあり小叔多る 曲嶂
 のもろもや私念合の惣好なり 此君
 田と友平厚ひま川や 梶牛 鼎下
 山とらつて山松の東明は 嵐英
 啼 雁東しらまのちとる乳 山月

明るさの少室のやうそ樹林 箕風
 けあう先や船く来る餅の子 満蝶
 るゆーを顔平くけし啼蛙 雪香
 くる破平灯のまらさ満や月の空 季真
 妻もや露草群とる承の人 其梅
 雪けの濁りも足せは荒川 月坡
 伊賀
 春へ見えも於木うとや若草思 遠水

府のーを平障子坊々や后の月 養瓜
 夕う先や風の力越かきて笑 工籠
 吸売のゆづる木下やおと鹿 眠馬
 増ある平妻の色あつ神中並 玉舟
 志々秋けするせり足あつ夕や春 ぶえ地
 やもろ木もくえぬ冬田の鳥家 二仙
 思ひつ久きふを度あり月足哉 若阜
 ーくもや一葉もく子松の色 求古

其

伊勢

春をよと紀人牙又とれつゆき産

五畝

笠のたれ服さ紀なまむ紀をあら

修巷

ゆる中よる訓又えや比と火桶

翠雲

日暮りやたつとせぬ壁際

玉岫

一しきやするや牡丹のちりめ

香池

まし翹やゆとすぬ知れぬ枝影

白止

又る処年住いと思ふ月夜

虚舟

吹つけよあそび際なく慮うな

蒸一

白の物し消さぬる隠や赤碓

胡蝶

暖日あり園をのそむや百念を

舟横

畑おの片も平ちらや已々春

夕焉

を拵え人平やとど若者真

采牛

ての川岸平昔のあらねら

把柳

たそらるる鳥の春か一其のそ

和樂

命ふ日をさうけて足ゆけるはかり

松圃

一々々々や山梨の國のあけぼの
 之青
 随夏の無りたりやもそ秋の色
 青松
 市中や月夜ありた松一本
 在竹
 祿の香けは花と直えは月の
 六川
 足あては浪を動かさぬか
 以桑
 百重の久内平やそは妻の面
 青崖
 急流橋の橋平松竹を引れが
 知南民
 そよく樹に渡日の蔭を
 菱青

以つけはよき年 採るく慮くな 蒸一
 印の物も消さぬと隠や赤松 胡蝶
 暖日より園をのそむや百合を 舟横
 畑おの片も平ちらや已々身 夕焉
 を持て人平とせし若者草 采牛
 ての川岸平昔のあゝおれ 杞柳
 たそらるる鳥の春を 其の音 和樂
 命ふ日をうけて人ゆけをたがふ 松圃

一山もや山は東國のまはれはす 之青

健負の車りたりやそそ秋の途 青松

市中や月平ありたは松一本 在竹

縁の香けは花と近そは月 六川

足もては恨をいふまぬか 以衆

百舌の久肉平やそそ妻の百 青崖

急水橋の碓平松水やそそ 知南民

そよく樹に浅日の蔭や 菱青

此とそよ山の依りや小東礎 淇石

秋一もや月平は夜毎れ言 梅西

霧をけを扱て見むやそそ 時兆

生皮は脱てのそそ 卜青

橋も小りお出で居そそ 柳渠

垣中平は月平は九月 采山

そそそそそそそそそ 水青

もろ房やまそそそ 桐一

ハ歌や種もく之をの人あはれ 捕亭

撫休む曰千松のやちる木のえ 松香

昼もまた追ふと出ぬ地りす 松童

二度浮てぬ之のうかつなり 昌風

舟のまじれ垣小振分の新屋は 崔渚

木と竹の中まのう棲ぐれ 篤之

兼おとまは藤葉も白ひたり 東宇

ゆもく人出て啼 荒の流らん春 惠西

影影小けりあはれ葉のむ 里友

咲あつてあはれ花 好樂

咲るぬのり有て木叶の落枝 春川

新つるふ輝く声ゆり小春を 尔豊

志はく久い幸く 小松の若きとら 陸水

水乃のたつや教すく具候よ 梅窓

羨るの歌てあ久や雪の水 宇栗

由久秋や立寄け葉も葉け肉は 子遷
 田の名けり出けり氷のぬるるけり 五鈴
 りめ笑やととのふり多くある 蟻扇
 香そけり方とあるまてぬふふが 立蒼
 河津や玉上志つむ門の光 梅曦
 ての戸れ明し心地や花開 雅琴
 元朝やさるまそれが門の 流芳
 イて風吹そめりつこのさる 霞汀

秋もやとどけくありし庭華 岐蝶
 揚きりて志州の声のけりけり 寒翠
 橋の中平笑ふとけりるけり 月岡

尾張

嵐山よて

花の表はと足川よかひるけり 而后
 池名もは池と池はて初魚し 一清
 歩りよる海と低く集り柳葉 黄山

あはれ月や火を路一 晝烟り
 月 底
 むりれて官平は店より換り乳
 鳥 津
 そとてまを来てた之の水部
 梅 裡
 麦畑や夫平来たら喜ぶ地
 鵬 居
 ありの汗は海平笑けり粟村
 李 裳
 山麓や流るる尼が町と流心
 應 知
 月代や子供控て町きり
 微 遊 女
 友山や下り起るまゝ水の音
 崔 叟

有明の心子れぬや帰花
 蓬 陽
 土川原やそれと見ても一穂
 有 橋
 八月や吹ましく夏風茶
 文 之
 来り木平禱めてふきり
 架 介
 空をそれてまはる来ぬ苗の足
 鳥 朝
 暖い扉の共来屋平淋五月雨
 思 文
 雨多き人や思ひ月平あはれ
 市 雪
 妹やせやありのうらひ目も生
 李 曠

信濃

くつゝ火や松風あれりる蟹 雪簑

炬をきねとさしゆけり 抽煙 獨醒

三日月やまゝの年 所 條のこ 路臣

蓬如上人の由文すうて

翌の身り知る 狂言 蠅 三都里

紫うぐれまきや牡丹のすけ 武栗

いれりまや今のてまゝ 川の中 圭布

ふあゝのむくくと 北の夜きん 靜一

といふのふを 秋を 故屋に 別業 墨芳

暮れを 換りのつゝぬさうて 乙人

松茸や 珠と 降る ぬ山の色 不測

来る 風のすけ けり 又 冬 花 月外

秋の 木を 友の 陽の 月 照れ 雪頂

甲を 官に 平 冬 冬 冬 花 白齋

増へりの ゆりや 又 花 踊 長莊

甲濃

一々もや所を宵露は灯の細り

欽哉

鞠袴ぬく千及夜をも介くれ

里笠

三河

卯のちもや隣をひま露度り

水竹

明止や落千ももる秋の寂

塞馬

何と留ぬ人の徳をや神崎山

蓬宇

枝之て此もぬつやちる梅

完伍

風呂入千々々そりや初烟子

三岳

あさる月や垣のゆかり城塔のこ

石采

駿遠

詠り矢の毒すみま塔燈を糸

杜水

孝くも春のゆけしる梅乳

且松

神度りく白のそりて三日の月

碧山

人の居ぬ堂をぬり明る生草

岱充

山名やぬもむ幾千おろす響

連山

房総

九上

夕ぐれの面平くひや荒の声 如是

川尻の海平成りくちと荒 以兄

菊苗や泣くまやう孔の極更 南雁

陸奥

出立一夫を掛るや花もとり 江三

接む母と篠平ちくくや雀母 一止

アコノ来て門心叩けぬ蓮戸外 奈女

さく常平志志く誠を祝身 尊阿

霞百代中子も妻六月叔父 太良

種くまや垣よりくもに昔を 宗言

木叶下や折まき香村有垣の栄 祖年

香のもれて梅と知るる深敷我 柳岳

花をまそく川幅足せろ常々乳 岱夢

蔓草ぬい川木とけりも秋付風 塘雨

七夕や頃れた走心似て新理 如美

九上

鳥兔免伸しりそ秋のうせ 句佛

うらたすやよくえんあて一の声 父雄

うら玉のあはれくちりぬ林村妻 可樂

炎名れをらそや別のはと幸と 無雅

賣とく子警啼て通るりり。 一求

山の井村けけし名流る居の掉 樂水

海るさこの海とよし一花のそを波 月泉

明るそや河のをそもまに持たれす 可松

巧るそう唱ふ月と田も持て菜村也 春松

竹教平ひと穂をれ込す地外 對之

庭の藪小僧一人のま入くれ 文之

名月やまう清きそ平物たそぬ 有節

支例て一度平唱や葛蒲妻 十羅

限の孔ま空のさ此や々都の秋 梅居

秋とらや尾指を足透す樹村妻 芦川

場炎や鳥のゆさらいそけ子 其圭

出羽

撰亦やあまふさるゝの十の里 御風
 耳もと越ふいとるりたる坂が 其儘
 何げなまゝ務の何り出まゝ宿き築 二葉
 もや盟のまゝる平家や坂やの井 佳風
 さそび人の来て清きや花の空 良和
 おいゆあや花平志向の上り坂 雪真
 ぬるもゆそとるもとをぬあふ余 蝶齋

へまふれはあまの明くや梨子花 乙樹
 人平そとて博のこゝの神川茶 木知
 鐘のまゝをて波る平ふれは蘇風 南江
 鳴く立てくわりのはまは江の陸 南里
 海苔のまゝや月平茶取の物替 菊童
 おくまゝや山をりもておら枝 泉籠
 日くれはもよゝ教やよぬ橋が 士鳳
 相のまゝ平月河之う何た茶 木賀

百々れをてつひて服をむ契桂引
 山晴やもをあふ木の家
 うねとる鶉の羽をひきけり藤の
 志のう人かま世そけい魂急ふ
 鶉の毛のけけりや梅の花
 喉猫の細くも度ふふちうるれ
 すくうのる鷹千 跡のつ所を
 而れれのを世終くさ世や時る
 雪守
 露先
 呉藍
 嵐二
 一草
 冷遊
 摂阿
 注耳

松前

藤とてろを出て素う人や橋邊
 つれの事を譲てけりぬ庭の蝶
 穂すく起千 風入ぬ障はけう字
 膠ふ葉千 包あまを先却りれ
 却るもも教はうれや瓜の蔓
 采蔭の出物 物字や五月晴
 北魚
 一甫
 稻錐
 格炉
 椿呂
 而先

越中

小舟も波折る子信や権の下 恕兮
 きのやと海は比とくろふ旅の二日來 不及
 紅梅や是を見よかしの表庭 逸江
 笛吹けハ悪平 白とく水鷺並 花精
 仕方のし 普清その事欠け 和鳴
 と又都の人平 波はり 渡れ 松兮

越后

寐時分は足少り月は遠く 乙良

くまらるる平吹舟の音や天の川 春室
 かくれ森や木の葉下下の葱畑 茶山
 柳あらしの挿路や花と日色 西疇
 ありんかたまたま乃ゆり 宋古鳥 古巷
 灯を上げて別る速や鴨の志 春成
 足通し 甲州の甲斐妻は 市猿
 近付ハ人平 鬼介 花の舟 北洋
 川 九平 春の流さる時鳥 鷺眠

九月月や納やとよのころの雲
 水を見て居れば帝が来古る
 鳴るゆゑも死て見せたり閑言鳥
 追ふまゝのるますれんそつ管
 ゆふれ汗お山のそきや青ゆじ
 暖やとまのりりるのたぐさ
 秋を待たぬの中や水の中
 かんれと秋風が川のそ来古る
 景化
 一水
 雲空
 椿雨
 對橋
 雪彦
 帶雨
 草湖

川よも是か一時のゆづり聲
 字のまはれ雁平志まはりの是か
 棚やよき日のゆづりあそく谷
 空のゆづりまはりの春ゆづりの月
 春志
 貞雅
 坂吉
 周齋

加賀

吹上りて流るる流るる木のたが
 多しそそそそそそそそそそそ
 後見せし人強うすや下りし旅
 丹嶺
 柳壺
 大夢

朝のちや等々の及母年一川 素玉
 かけたけの久折もあり花を香 止園
 狗の子は春を平憐りに葉を 悠平
 人の房中より藤子よりおけ山 鶯呼
 音をるやうに宣うるよま愛り物 賀水
 己の心を城を平たして葉作り 我柳
 次やうと折しは花や三井の陸 雅居
 傾て地を平一画しは牡丹葉 卓大

能登

十六の宵の音やゆる北西の空 鳳分
 花はけの何れもあけはまは牡丹 東海
 花はよぬはれぬ山なり川分は 生化
 木鏡を遠の空を空と燕子む 竹塙

若狭

波すそはまはるる春多し虫の夜 水哉
 三日月のらんちるるけあり松と花 微笛

但馬西丹

梅干の葉平利々好るすまは 大年

他村より女奴て用立木のたれ 松露女

辻重や三日月下起それへもれ 雲帯

燦比のつは多くと枝の是れ葉 九美

お名の葉もよる木草一先 東柯

正月の三日月入ぬ松の外 喜節

枯れくもち余もよるや江の柳 無着

細代お愛へ来るや松のりや 花川

大和

眼もあしは波たも霞やぬれを畑 金葩

ゆをうてあそむもよるや跡を地 香玉

足あられは色を愛する梅舟 葉丈

播磨

蓮生や壺の月平もよるくす 可大

常盤もくけり秋もよるや旅を吹 必山

壬生寺の草子とて分るに月乳 尺西
寺のあり種く出初めや若菜の日 史隆

西備

松ヶ寺も大い河に大振曳 布国
い形つまや侍まの漁もとを 涼呼
茶寺の海平に吹るや操成し 晋水
牛市れ所て敷出す柳乳 香雨
きして出る今またいつ久本伏不 東嶺

まろーものめ程と製れり牛乳 樵石
滋るも未たも音や存とまき成 素濤
細代木や魚り為るる二日月 碩志

伯耆

すしー山や入徳の来月の色 南岷
おろしー通るーくれや志葛原 大夢
湯平ゆき音波表も中し柳 万丈
まに口しる未久やうけり福松魚 塔居

刈平海不汗青くは新樹却 景太

巴五布のやうも人さや花の花 竹臺

明月と来す事一は木の本の空 友琴

鷹匠のまつともさぬや山仰し 成娥

自の鷹平押をんせそ指さ美弘 登山

出雲

ハ鈴や牛平龍走の高き一様 百年

川毒やあゝ塚さゆる麦の中 沙窓

やみ隠の一様事一 秋の面 尺山

木平雪れ此と隠年村嘗 百齡

左有のらおせもあはれ畑乃 蘭和

阿波

弓法は脊の反靴くつをり外 魚樂

町一町や松平つらまゝ根城地 菊池

舟此舟の足とく揚ふり舟み奉 芳之

未くれや鶉吸おるは裏け山 希康

燃きく砂撫りくんとは 蓬壺
 山も孔きくて是のくや月の電 楓處
 暑涼くあ平降く玉返の音 樵雨
 風くけの孔くて音けくれ尾を 梅廬
 井の水の煙くくくや菊け花 回風
 水仙や食浜のをうし来る堰 南園
 あ平川くくくは夜のも 富草
 七夕の意願平くくくは 茶城

素くくくくくくくく 瓜の次 萬像
 瘦教の起すくくく 秋け花 受象

伊豫

夕月くくくく名や六日七日 柴人
 内北くくくく利振の川嵐 映門
 稚子や何を形其の五色糸 起久木
 羨平くくくくの榮耀や夜の中 芦岬
 きくくく子や返風くくく 卯角

七中やをやすま元一散白ひ 鬼章
 川さす秋を戸や 裕を文に奪て 葵笠
 歩りちと枝の廣く影の月夜に 月歩
 雲千膳月やふらふらと人の舟 蟾居
 羨るの去て無気く一の舟 菊洲
 うく残す千此とく矢す山詠に 漁翁
 七夕や懸し出 なき宵に 鳥岬
 よ似歎千あつて西原ふみ火に 九虹

九州

昔の夜西日ふせにけちる一葉 甘古
 さしのかる日のすとほや峰の雪 泉砂
 月夜を教の表れさるるがれ 斗丈
 息込の蒼千一尾の松枝葉 悠々
 のうれ来て旭志くふや暖める 二石
 小舟及犬の付けりおる月 駒童
 此とく立する子けとく文柳葉 甫田

遊歴

厂々ぬや山寺の峰をよむ心久 天遊

梅の香や川煙の岸杖の影 玄子

明海や雪平之川岸杖の元 波同

あゝ木香のうしろぬ橋や妻は月 鳥谷

丁亥叔の影を立場の柳を 碩水

川さき起く暮年を画して初馬 念々

あぢを色く日くま青田乳 荷子

鴨川や子多おとれよ妻のうゑ 佳峰

よ六月の比る宿山ゆりく妻の秋 餘力

寝を廣く流るやう平妻は地 挑五

東のうも平山路越来々市茶菜 北鶴

暖く木をえくぬと水平高橋 雨谷

梅平来ておとんう片う山山風 孤南

低くても水す松平や為具出 淡節

あゝのれあり山ゆりや又鞠唄 閑令

いねつもや前平海ま斬の暮 桐古

るゆのすすのよまえては月 雨江

枝ありのんまてふんは冬の花 竹交

踏く来し藤子の中や起りて 石声

明かす花おを照くと九月月 仙巢

海風て松のせほしけく陸 銀岱

月入るあまの垣ぬや猫の息 秋對

照いそよま雪惜みする冰生ふ 東升

明くもや志向平決てり方向 田禾

妻の日は津降是るはとて東のる 芝水

卯のまや炬より出り出水ゆ 青和

宵更なる年明る常のゆりや水 正令

出りけりて一日だけぬ年酒花 杜涼

ちりつそえまや日和の晴水口 勝錦

星のつる出ぬ空ゆりて春木 木容

白いのはゆぬやとほしき燕子ま 風阿

梅室

枯果てなほ日年さるる辰

揚船並ふ冬の川へ

責めしむる世年さるる夏

火を掲る世としおるる秋

月年立人うく見れは板

ふく春もをぬ風の身あり

曲淵

室

淵

り秋年問屋本締の織紗

匠の残るか壁年巾あり

嬢の念入きて坊あり

くれそらうくは仕裁あり

辻店の床下たのふ橋の詰

城の表うら詠るの毛々障

月蝕け流るるく尺天影涼

空の良漬地とく常年おやする

室

淵

室

淵

夜も寝られぬあはれ事ぬ之
歩むるもよき事ぬ
古宮平花はゆかしの瘦木を
妻の所居に越えし
着出の借しぬれと足ぬ
喧嘩の足付をよき事ぬ
推しぬれぬ事ぬ
言ふ事もぬれぬ事ぬ

事平馬もよき事ぬ
黄布もよき事ぬ
奇もよき事ぬ
世もよき事ぬ
玉もよき事ぬ
いれもよき事ぬ
子もよき事ぬ
つれもよき事ぬ

さやまもふしのさきも忘れず
 その秋告けつゝ此一時
 ゆゑ粒の塵りつれり祝賀
 とくけ荷物れとあつ住家
 仲とさねは紋目しつゝ久れはる
 たれくはれきと腕ぬ昔汁
 室 洞 室

紀伊和泉

雨雲や花や月をおお心
 口のふけけはまき食もや鶯の籠
 巧く吉年想のありし時多
 服をいゆある落葉流や風の音
 蕨よその通れを青い牡丹畑
 志のまきそ吹散そめ桜葉
 鳴きそゆれさめり猫の意
 月下 梅翁 南溪 其谷 青蝶 巴曉 蘆汀

和泉

和泉

花平反片ぬ核の禁組茶 琴風

おまゝい海に朽てゆる木や若葉花 梅鈴

巧と核の由とて平邊の虫原草 山笑

玉さとのひと、毒も皆たをり福 旭子

小茶を葉中の刈花足茶 桃仙

叔桜や灯平青紀垣の休 喜水

あまや毒も慈葉の出高紙 俊山

通人のあふりて足るや種ふと 其伯

花平反片ぬ核の禁組茶 孤楓

木好しの舟噴毒をちり危 月窓

葉のゆ子もいふあはれと春 英月

美れ大町の有明そ露くれ 世外

もつ花や寔へるす瀧のふ 秋琴

峯おらる嵐と弁 山櫻 葵塘

赤家りて可くこれらる露の臺 青谷

空平れき思ふ出まけり花の上 石雅

まの音を聞きた声やをの蛙 休叟

誰も居ぬ夜の志のまゝや妻の月 此松

風平 嘆月よ草や梅の花 梅岳

庭をゆく虫のそと出る榎ヶ孔 南暉

孔のまじやまじは側ハ町つま 馬風

まをきかえ響る言 氷のこゝ 金江

戸ぬきの響孔をや妻の背 野蟬

折て来たの楸まけける清氷茶 鹿野女

日のすぢまけける咳る榎ヶ孔 江鳥

研たてる芥の又光る口の紫弘 畠春

のせそきる葉まじ居るは 垣牛 其律

万葉や袖ふたひ平ふく白髪 松丈

藤平の枝の活と木をいとも 木父

取の孔まじや 雨足

黄鳥や 葉の返は月す 声の先 子火

足はめり 峯は雲孔 鳴電雀 此方

松の香けし平是るや妻の山 麦雨

あつらふ年詠ふ人も折をり橋 松玉

五月返平夜志のまゝや新亭 松好

夫うせや白帆のすけり松のる 竹雌

樹の名は年くらのまゝ妻は風 竹影

ちるのせお身のみ之軽き松は雀 竹葉

春風や一日く平木の青き 一枝

梅のうけハ音のゆりや春の月 楚南

閑雀の餌を喰ふ守りなきは 其昌

麦の葉平ぬれはあまを乾かす雀は 松雀

咲花やうりりうまぬ振打を 松風

音のけりや信よ乾片山家 松竹

翠玉のわくはさる火桶茶 春黛

秋の明ぬるち橋越すや若家 五葉

掃切と庭や比そく春の面 音月

咲は藤一葉のくちや時名 孤鳳

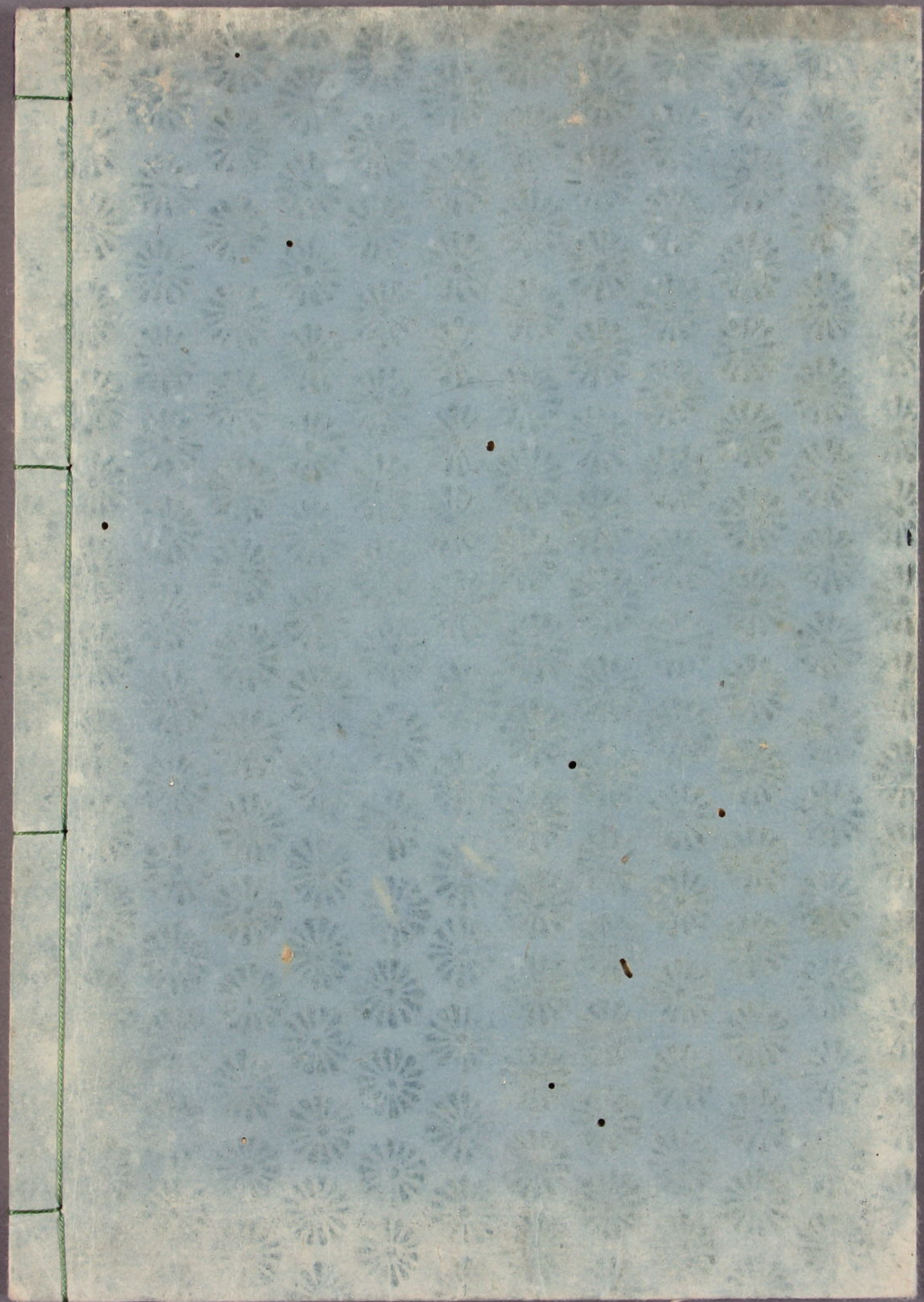
晴のよひのふりぬる梅花 曲洞
 リ妙年山風ふけて時多
 甲よりせ年終日過ぎて秋の月
 風や、乾くをのりの清水

蕉門御集冊摺物師

湖雲堂

皇都四条通寺町東入南側

近江屋利助



東坡先生集

弘化四年丁未春

非諧燮集

憲屋曲淵編

う
以ふる方か ち付くもい

五日もふに持影を脱

も 浮世は時と立派な

買ひ花も葉も挿げ成る

か世言別 命後の方

こま化 演れを交りし

かゝる時

九月

曲園

東本基林

あ

とつ井之代と夜

つれづれ葉の丸

清きのみやうけり葉の

十五能く

空の海は松を流す水鶴

海へ